

エアガンを撃とうよ

017

撃つことの面白さを再確認する大特集!

Cover Photo
DoD
© WORLD PHOTO PRESS 2019
※本文中の価格は消費税込みの総額表示です。

CONTENTS

004 **LRRP**
EYES OF SKY SOLDIERS
もう一つのグリーンベレー by Jay Borman

012 第9回 **サイゴン物語 Saigon Memories**
Military Uniform Stalls in Hanoi
—ハノイ駅ガード下の軍服屋—

東京マルイ ●Report by Taku

056 **静岡ホビーショー・**
ニュープロダクツ

WESTERN ARMS
062 **コルトMkIVシリーズ80**
《ワイルドホーク・カスタム》

WESTERN ARMS
066 **ハードボーラーT1**
《ターミネーター・モデル》

月刊
071 **THE グリーンベレー**
GREEN BERET
AFGHANISTAN 2019 ●文と写真/DJちゅう

076 **5.11 TOKYO**
COMBAT Recommend item Vol.6
Keep training everywhere!

078 **ニッポンの力こぶ**
第22即応機動連隊 ●写真と文/菊池雅之

シン・サバゲ三等兵
082 **サバゲーフィールド友達の輪!**
PARADOXさんからのご紹介!
オモシロフィールド“戦(イクサ)”へGo編
●写真と文/繪本知之



086 **Militaria Roundup!**
WWI ドイツ帝国陸軍の軍装 Part 2

092 **NEW GENERATION STYLER** by fujiwara

100 **トイガンニュース**
●WA ベレッタM92FS《ダイハード・バトルダメージVer.》
●タナカ 三八式歩兵銃&三八式騎兵銃Ver.2 GRAY STTL FINISH
●タナカ S&W M19 4インチ・コンバット・マグナム《HW バージョン3》
●タナカ SIG P220 IC EARLY《スチール・フィニッシュ》
●タナカ グロック17 3rdジェネレーションEVO2《フレームHW》

COMBAT FRONT LINE

- 049 最新映画情報「スノー・ロワイヤル」「パー・ジ・エクス・ペリメント」
- 051 静岡ホビーショー
- 052 G&G LOVERS 2019開催
- 054 兵庫県 CQBHOSTハンドガンイベント開催
- 055 リスクコントロール通信 No.4
- 104 新製品てんこ盛り! COMBAT mono
- 106 サバゲ三等兵APS部 今年APSカップ東京本大会に初出場する君へ
- 108 コラム ベトナムを遠く離れて——。文/小倉 徹
- 109 ゲームOTT『DAYS GONE』
- 110 レアミリタリーテクノロジー
- 111 ツゲチョリ びっちょ「葉隠」に挑む!
- 112 兵装嗜癖
- 113 PRESENT
- 125 CIC
- 126 バックナンバー
- 127 奥付&次号予告

特集

エアガン を 撃とうよ

小題
林拓
字

撃つ。打つ。鬱。T.UTU——。

この世に存在する様々な“ウツ”。その中から今回本誌が取り上げるのは“撃つ”。そう、エアガンを撃つこと。

エアガンは玩具だ。

にもかかわらずこの国のメーカーとユーザーはそこに玩具の範疇を超えたなにかを求め続けている。

エアガンが進化し続ける理由はそれだろう。

平成から令和へと時代が変わった今、

現状に決して満足しないことで進化してきたエアガンはこの先どんな進化を辿るのだろうか？

それは誰にもわからないことで、でも、だからこそ大きな期待を寄せてしまうのだ。

ただひとつ、どんなにエアガンが進化しても変わらないこと、それは撃つ楽しさだ。

世知辛い現代社会で生きることは簡単ではなくて、息苦しさをを感じる…そんな時はエアガンを撃とうよ。

手の中のスマートフォンでは知ることのできないなにかをきつと味わえるから。

好きな方はいつものように、まだ撃ったことのない人はだまされたと思って、さあ、エアガンを撃とうよ。

前置きはこの辺で！ 老いも若きも男も女も楽しむ準備はよろしいか？

アーユー レディ？ スタンバイ！

Beep!!!

写真 / 小林の世界 (Taku Kobayashi) 文 / 編集部

最も影響を受けたのは「ルパン三世」のあの人気キャラ

——堺さんが初めてエアガンを手にしたきっかけを教えてください。マック堺（以下、堺）：元々小さな頃から銀玉銃砲が好きでよく遊んでました。するとある日父親がつづみ弾式エアガンの組み立てキットを土産に買ってきてくれたんです。あとはなんとといっても「ルパン三世」の影響が一番大きかったですね。

僕はエアガンを撃ちたかったの、なにか一人でできるものを探しました。そしてそれこそコンパクトマガジンでケンノザワさんの記事を読み、シューティングの存在を知ったんです。——ありがとうございます！（笑）

マック堺の意外やとほほなシューティング事始め

堺：最初は部屋で一人で撃ってましたけど、そうすると、なんとなく自分はうま

堺：いや、最初は、とにかくなにか競技に出たい一心で、当時MGCが主催していたモデルガンショーというのがあって、そのオプションイベントのマンアゲインストマンというマッチに出たんです。ところが僕は「スタンバイ、レディ」でブザーが鳴り、撃つというルールさえ知らなかったから、なにもしない間に終わっちゃったんです。——惨敗したわけですね……。——惨敗。技術も精神面もだめで、かな

とができて、APSも始めました。だから仲間を作ることが、エアガン競技の上達と長く続けるための秘訣だと思いますね。

エアガンから実銃へ、そして再び……

——そして実銃の世界に飛び込んでいくわけですか。

堺：元々、実銃を撃つということは、イチロー（ナガタ）さんやケンさんといった業界内でもさらに限られた有名な人た



堺：1997年に一度出た後、しばらく出なかったんですよ。違った射撃の方向性を探ってクレー射撃を始めたりして。それから2000年にまた出始めて、2004年に優勝したんで、8年くらいですか。でも、実銃は撃つ場所も限られるし、お金もかかるしで、またエアガンの世界に戻ってきたって感じです。

YouTubeと赤羽フロンティア山中社長との運命の出会い

——YouTubeを始めたきっかけは？

堺：諸事情あってまずアメリカに行かなくなったんです。更に仕事もそれなりに忙しくて時間が取れず、このままだとエアガンも撃てない、と憂えていました。それでなにかエアガン関係で「仕事」というものなんですが、まあ、長い間シューターとして楽しませてもらったこの業界に「恩返し」がしたいと思い立ったんです。その頃日本のシューター人口がどんどん減っていたことも重なって、まず手始めにシューティングの普及を目的にしたDVDを作ったんですが、これが鳴かず飛ばずで（笑）。でも、DVDをお願いして、お店に置いていただいたことがきっかけで、山中社長（赤羽フロンティアの名物社長）とお会いできたんですから！

当時僕はAPSから完全に離れていましたが、社長が凄く力を入れてらっしゃるのを見て……。——また、引きずり込まれたんですね。堺：社長がそこまでやるなら僕もまたやってみよう。それで、ちょうどYouTubeが盛り上がり始めていて、じゃあ、そこでメーカーさんのPVみたいな動画を作って、その中でエアガン競技も知ってもらおうと思ったんです。——エアガン競技の普及が目的だったんですね。堺：でも、当初はなかなか見てもらえませんでしたね。ただエアガンレビューだと見てもらえたので、そちらの方にシフトしていきました。

——エアガンレビュー中にスティールチャレンジのラウンドアバウトとAPSカップのブルズアイを必ず入れるのは、意図があつたことなんですか。堺：そうですね。とにかくスティールチャレンジとAPSを知って欲しい、という。そして興味を持ってくれた視聴者が実際に競技を始めてくれたら嬉しいですね。——動画撮影時に気をつけていることはありますか？

堺：未だにミスはありますが、実際のスティールチャレンジやAPSカップで競

技中に行なわれているのと同じ銃の扱い方（安全管理）を示せるように毎回心がけています。

——エアガン競技普及ツールとしてのYouTubeを評価していますか？ また、今後もエアガン動画配信を続けていきますか？

堺：今の時代だとYouTubeが最も波及力があると思います。あと動画配信の継続に関しては、山中社長が付き合ってくれる限りは（笑）。本当、こんな金にもならず、場所もとるし、時間まで割っていたで、毎回申し訳ないのですが。——その山中社長は堺さんにとって盟友になるのでしょうか？

堺：盟友、友達というより業界の先輩というか……。とにかく尊敬する方です。

その気楽さ、圧倒的！

——「実銃とは違うエアガンの魅力」とはなんですか？

堺：手軽さですね。実銃だと人が怪我したり最悪亡くなっちゃうじゃないですか。勿論取り扱いには実銃と同じにしますが、圧倒的に気が楽ですよ。毎年のように渡米して実銃を撃っていた頃は、帰国する度に、自分も人も怪我をせずに済んでよかったな、と胸をなで下ろす感じでしたから。それに数も沢山撃てるじゃないですか。自分は練習の虫なので、あれこれ試しながら練習ができるという点も、エ

アガンは凄くいいですね。——練習がお好きなんですか。堺：本当は練習だけやってみたいくらいです（笑）。試合では撃っても200発くらい。でも練習なら自分が撃ちたいだけ撃てますから。とにかく、撃つのが楽しいんです。今もずっと。——じゃあ、YouTubeで撃っても楽しいでしょう。

堺：ところがどっこい、近年は腕が腱鞘炎でだめなんです。昔は半日～終日ずっと銃を撃っても平気だったんですけど、今はたまに腕に激痛が走るんです。そうなる練習を休まないとダメなんです。その間の「繋ぎ」というのが、実はYouTubeを始めたもう1つの理由なんです。だから、腱鞘炎さえなければ本当は動画なんか撮影せずにただひたすら撃っていたいというのが本音です（笑）。——そこまで？

堺：ただずっと同じ銃を一日中撃ちたいです。ハイキャバを。

——今、いい名前が挙がったので伺います。ご自身の伴侶と呼べるエアガンを一挺挙げるとするならば？

堺：やっぱり、一番撃ってるハイキャバですかね。

——具体的にどんな点が優れるのでしょうか？

堺：ずっと撃ってて好きになったというのがまずありますが、安全装置が扱いや

もっとゲーム的な要素を取り入れたりといった、新しい手段を用いて、より多くの人にエアガン競技の存在と楽しさをアピールできればいいと思っています。——なにか面白い企画して近々ないんですか？

堺：ああ、この間、TM NETWORKの「Get Wild」を歌いながら撃つ、っていう動画を撮ったんです。

——ああ！（笑）

堺：ああいうのはまたやりたいですね。今



総力特集 エアガン Let's shoot air guns! を撃とうよ



INTERVIEW

“マック堺”のエアガン射撃のすゝめ！

2004年には世界を制した日本が誇るトップシューターにして、今日は337,217人（2019年5月7日現在）のチャンネル登録者数を誇る人気YouTuberとしても知られるマック堺氏に、コンマガが直撃取材を敢行！ エアガン射撃の魅力を持った!!

写真：織本知之 聞き手・文：狩野健一郎

——「ルパン〜」ではどのキャラクターがお気に入りでしたか？

堺：それはやっぱり次元大介でしょう！銃の腕が凄くて痺れました。ルパンはチャライ感じが嫌でした。

——シューティングとの出会いはい？

堺：中学生まではサバゲーが好きでサバゲーばかりやってました。だけど単に飽きたり進学があったりして、周りの仲間が徐々に止めていくわけです。それでも

いんじゃないか、って思うようになるんです。

——そりゃそうでしょう。その後世界チャンピオンになる方なんですから！

堺：いや、そうじゃなくて！（笑）。結局、判断基準が自分しかないから「うまい」と勘違いしちゃうんです。でも実際に大会に出てみると全然だめでした。

——それはジャパン・ピアンキ・カップですか？

り落ち込みました。——でも、そこでくじけなかった。

堺：やっぱり、まだまだ撃ちたかったんですよ。その後ジャパン・ピアンキに出ても、最初は全然だめだったんですよ。まあ、それまでずっと練習を一人でやってたせいもある。そうこうする内に、競技会場で仲間ができて色々教えてもらえるようになり、徐々に上達していったという感じです。他の競技も知るこ

ちの世界の話で、自分にとっては絵空事のように感じていました。それが、たまたま僕がIT関連の仕事をしている関係でケンさんと繋がりができたんです。そしてアメリカに行く機会があって、その際、ケンさんの所にお邪魔したりしている内に「撃ってみたいか？」と誘われて、レンジに通うようになったんです。

——その後、何年くらいでUSスティールチャレンジのチャンピオンに？



SHOOTER にとっての 東京マルイ

by Takeo Ishii

筆者は実銃・エアソフトを問わず、様々なシューティング競技を幅広く嗜んでいる。恐らく誰よりもたくさんの種類を、そしてどれもに相当な熱量を注いで「本気で」やっている。精密射撃、タクティカル、スピードシューティング。静的なもの、動的でアクティブなもの、とにかく色々だ。そして東京マルイ製品は種類が多い。筆者がやっている全てのシューティング競技を東京マルイ製品だけでフルカバーできる。さらに、これはシューターにとって最も大切な事なのだが、東京マルイの銃ならどれも必ず「こちらが求める水準以上に中(あたる)」のだ。

5cmの呼び鈴は5mから狙うとかなり小さく、5発だけで全部中てる人はとても少ない。筆者もダットサイト(MGC/エースポイント)をスライドに直載せしたMGC/M93Rで何度かトライしたが、5発クリーンはなかったと記憶している。

この頃はフルオートもセミオートもエアコッキング式もクラスが分けられておらず、ほぼ全ジャンルのエアソフトガンによる異種格闘技戦の様相で順位が付いて行った。なので1位、2位になるのは大抵JAC/スターリング等のBV式フガス・フルオートだった。上手い人は端から「ババァー！」と流して撃つのではなく、一つ一つの標的を狙いながら指切りをして撃つ。1トリガーで数発ずつ、適度にバラけながらBB弾が発射されるので「吊るされた小さな呼び鈴を鳴らす」という内容には明らかに有利だった。それを追いかけて何とか10位以内入賞＝賞品GETを狙ったのがMGC/M93RやWA/AR-7ピストル等を使うシューターたちで、筆者もそこに属していた。MGCが伝説の大規模シューティングマッチ「ジャパン・ピアンキップ」を1984年にスタートさせ、1985年にはガスガンのM93Rを発売した事から、この1986年は筆者も含めた多くのシューターたちが得物(えもの)をモデルガン(※キャップ火薬の微量赤外線



筆者が現在最も熱を上げている実銃はCQB GUAMIに預けてある「SIG P320 X5」である。近い将来、東京マルイから最高のガスブローバックが発売される……事を、強くご期待申し上げます！

きの1,900円(当時)！この銃を自作、もしくは1,000円前後で販売されていたキットパーツを組み込む事でポンプアクションに改良し、速射性を上げたカスタムを彼らは使っていた。

我々「MGC系ガスガンシューター」が手にしていたダットサイト付きのM93Rには15,000~20,000円程の製作予算が掛かっているのに対し、彼らのマルイルガーは多く見積もっても3,000円以下なのだ。

値段にして1/5~1/10の手動銃が、当時の最先端だったBV式ガス・フルオートやセミオート・ハンドガンと肩を並べていたという驚くべき事実！これが筆者=石井健夫が東京マルイのエアソフトガンと射撃レンジで邂逅し、その高い性能を心に強く刻んだ最初の記憶である。

標的が感知する「シューターワン・システム」からガスハンドガンに移行していた時期だった。みんな新しい銃を手にし、射撃の腕を試す機会に飢えていた。

そして、1位2位はBV式ガス・フルオート、以下の3位~10位はMGCやWAのガスハンドガン、と、商品圏内のTOP10は連射可能なガスガンが独占か!? と思いきや、いつも2人や3人は必ず、エアコッキングガンを使うツワモノが入っていたのだ。

そんな彼らは例外なく東京マルイの「ルガーP08」を手にしてた。本体価格は驚

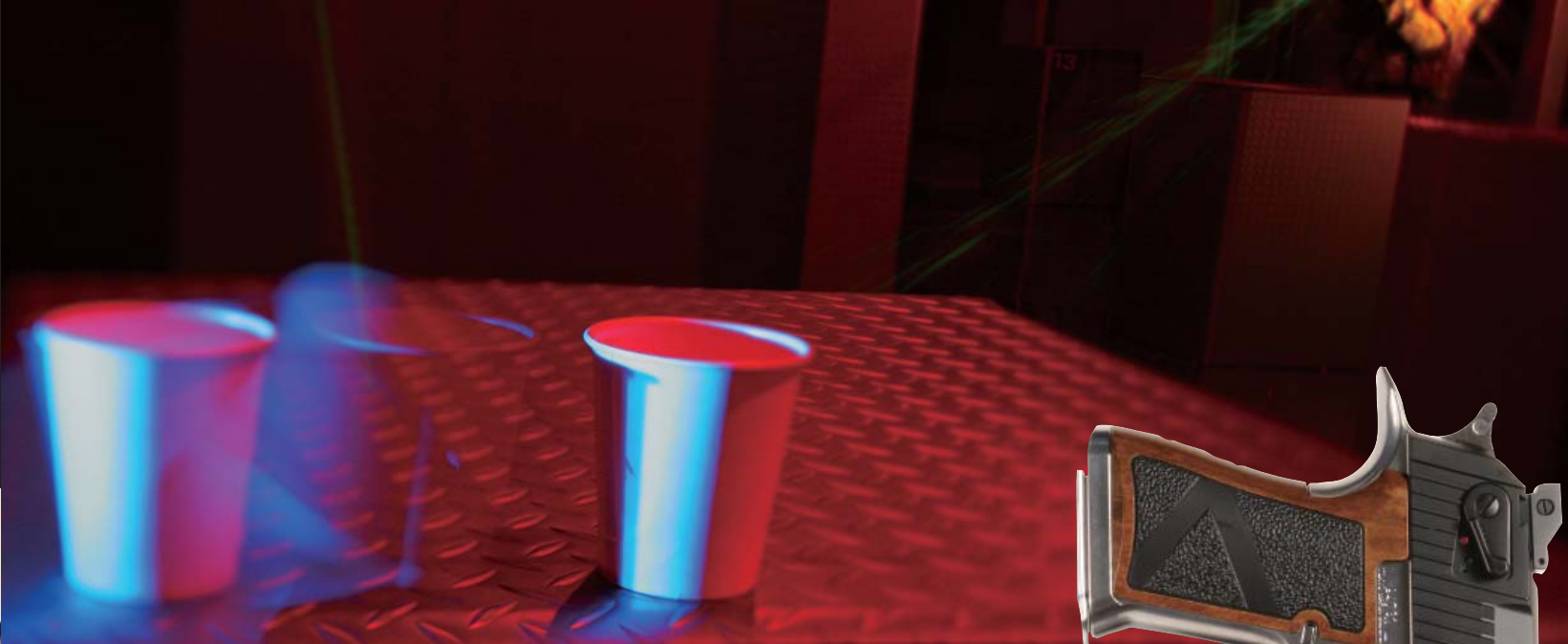
マッチといっても衝立に掛けられた黒い布に5cmほどの大きさの真鍮製の呼び鈴が5個、60cm程の間隔を空けて横一列に取り付けられているだけのシンプルなセットアップ。これを5mの距離から笛の合図と共に左端から撃ち始め、5個全部にBB弾を中(あ)てて「チリン！」と鳴らすまでのタイムを係の方がストップウォッチで計るといふ、まあ、いまの基準でいえばじつにおおらかな牧歌的な内容だったが、その日の上位タイム10名までに入れば何かしらの賞品が貰える、という事でいつも盛り上がっていた。

「1,900円のルガー」に5~10倍も高価なカスタムが喰われた。

1980年代の終わり頃には既に、現在の「ブラックホール」や「ビクトリーショー」の前身に当たるショップ主催のガン&ミリタリーショーが盛んに開催されていた。確か「JTGC(=ジャパントイガンクラブ)」だったと思うのだが、愛好家団体の主催で会場の一角にスペースが設けられ、ミニ・シューティング・マッチが開催される事も多かった。「受験勉強に集中しなければならぬ」と口では言いながら、18歳の浪人生だった筆者もそういうイベントによく通っていた(笑)。



圧倒的な命中精度、そして飛距離！東京マルイのノウハウが凝縮された電動ガンのHOP-UPチェンバー。



どんな新製品も命中精度は保証付き。これが東京マルイ・クオリティなのだ。

命中精度の理論」を'80年代に確立。

1987年、晴れて大学生となった筆者はある日、背中にデカデカと銃のイラストが描かれたスカイブルーのTシャツ(※GW恒例のMGCガンショーで開催されたマッチで商品として頂いた)を着用し、前方の席で講義を受けた。その講義が終わると一人の同級生が声を掛けてくれた翌日、彼=マツモト君が持参した愛銃もまた、東京マルイのルガーP08だった。「ぼくはいつもコイツでポテトチップを撃っている。MGCのM93Rも持っているけど、こっちの方が安くて良く中たるから好き。」と彼は言ったのだ。

もっばらMGC製品を愛用し、その前年1986年末に発売された「ウィルソンLE」にもすっかり慣れ、本格的な競技シューティングに益々のめり込んでいた筆者の目には、ほぼオールプラスチック製のマルイルガーはいかにも軽く、また安っぽく見えた。そして生意気にも(笑)P08独特のトグルアクションまで再現していたので、ピストン&シリンダーの容量もタカが知れているように思えたり、コッキングする指に感じるバネの力も思ったよりずっと弱い。

にも関わらず、誰も居ない教室の机の上にマツモト君が並べてくれた直径3cm程の丸めた紙を、歩測で計った距離約5mから面白いように撃ち落とせるその

命中精度に驚いた。発射される弾の威力(弾速)だけに頼るのではなく、「トータルなバランスを整えた上でこの精度を出している」感じがとても新鮮だった。まるで次元の違う「何か知的なもの」にすら感じられたのだ。

エアソフトガンの命中精度を決定付ける諸条件。それを具体的に述べているのが別頁で紹介されているKENさんの「クリーンヒッター理論」だが、今にして思えば当時の東京マルイは製造メーカーとして唯一、それを凌駕するレベルの「エアソフトガンの命中精度に関するノウハウ」を掴んでいたに違いない。

エアガンブーム真っ只中の1990年代初頭に発売されたMOOK本の一つに、各メーカー代表者の方々の特集記事が1社につき1Pづつ掲載されているものがあった。その中で東京マルイの岩澤辰男専務(当時)は、「銃身は長ければ良いというものではなく、射出されるエアの分量に見合ったちょうど良い内径と長さというものがある。」

「BB弾を保持するチェンバーラバーの材質(硬さor柔らかさ)とそのホルド力にこそ、命中精度の秘密が凝縮されている。」とハッキリ述べておられる。



1996年1月に社員になった当時、東京マルイ製のガスブローバック・ハンドガンはデザートイーグル50AEしかなかったので、この素晴らしいホルスターを名門ブランド「SPEED」にオーダーメイドで製作して頂き、数々のマッチに出場した。6インチにも10インチにも対応するデザインが秀逸！今も大切にしている宝物なのだ。



WAが開発したマグナブローバック・システムは、実銃の作動プロセスをトイガンでリアルに再現した革命的なメカニズム。



M1911系現行モデルに組み込まれたトランスファー・ハンマー・システム。コックされたハンマーを安全にレット・オフするホンモノの操作感を実現した。



限られたスライド内のスペースを最大限に利用して、正確な作動と迫力のキックを生み出す最新のビッグ・ボア・シリンダー。



ガスコントロール・システムを組み込んだマグナ・モデルの心臓部を構成するパーツ。トランスファー・ハンマー、ガスコントロール、ビッグボアの3つが、最新・現行の「ハイスベックVer.3」メカニズムだ。



全体をシェイブしたスコット・タイプのグリップが握りやすい。デザインやサイズを選べるインターチェンジャブル・トリガーも、カスタム・ガンらしくて魅力的だ。



数多くのモデルが製作されたWAのM1911ハイキャパシティ・シリーズ。インフィニティ・エキスパートは、ウイング・ガード付きのリア・サイトが搭載されたハードユース・タイプ。

マグナ・モデル発売5周年を記念して発売されたM1911ハイキャパシティ・シリーズ。セミオート型マグナ最大容量を誇るマガジンが、切れの良いハイスピード・ブローバックと、強いキックを生み出す。



しっかりと押さえこんでもガンガン来るキック。25℃を超える「夏日」には、スライドが飛んでくるのではないかと心配になるくらい強烈だ。



薄いゴムシートを適度なサイズにカットしてマガジン・フォローを押さえこめば、即席の空撃モード。お座敷シューターにお勧めの方法だ。



ダブルカラム・サイズのマガジンは、マグナ・セミオートの中で、「最大」のガス容量を誇る。ショート・バンパー・タイプのマガジンでも30発のファイアパワー!!

数多くのバリエーションがモデルアップされたWAのM1911ハイキャパシティ・シリーズ。インフィニティ、STIなど、人気モデルが網羅されている。

ガス・ブローバックの世界を切り拓いたWAマグナ・システムの魅力

Photos & Text by SHOTGUN MARCY



総力特集 **エアガン**
Let's shoot air guns!
を撃とうよ

1994年の末、満を持して登場したコルトM1911A1シリーズ。世界を驚愕させたマグナ・システムは、その後様々な改良が施され、現在ではさらに優れた作動性と強いキックを生み出すハイスベックVer.3へと進化している。

トイガンの世界を一変させた革命的なガスブローバック・システム

1980年代は、日本のエアソフトガンにとって、大きな変革の時期だった。誰でもすぐ頭に浮かぶのが、1980年代半ばに、単発式のコッキングモデルから、トリガーを引くだけで連射できるセミオート・ハンドガン、MGCの「ベレッタM93R」が登場したという事実だろう。このモデルは、後に多くのマイナーチェンジ・モデルやバリエーション、そして同様のシステムを組み込んだ数々の人気モデルを生み出して、一世を風靡した。同時に1980年代は、それまでツツミ弾

や銀玉を撃ち出すことを第一の目的にしていたトイガンが、モデルガンに迫る外観や質感に変わり始めた時代でもある。そのきっかけになったのは、マルゼンの「KG-9」だったと思う。当時、UZIやイングラムM11の人気に影響されて、大型セミオート・サイズのマシンピストルが注目を集めていた。マルゼンがなぜKG-9をモデルアップしたのかは知らないが、おぼろげな記憶では、アメリカのストリート・ギャングたちが、合法的に販売されているセミオート・モデルをフルオートに改造して利用している、と言うような情報が当時よく流れていたような気がする。元々オープン・ボルト方式なので、改造が簡

アイズ オブ スカイソルジャーズ

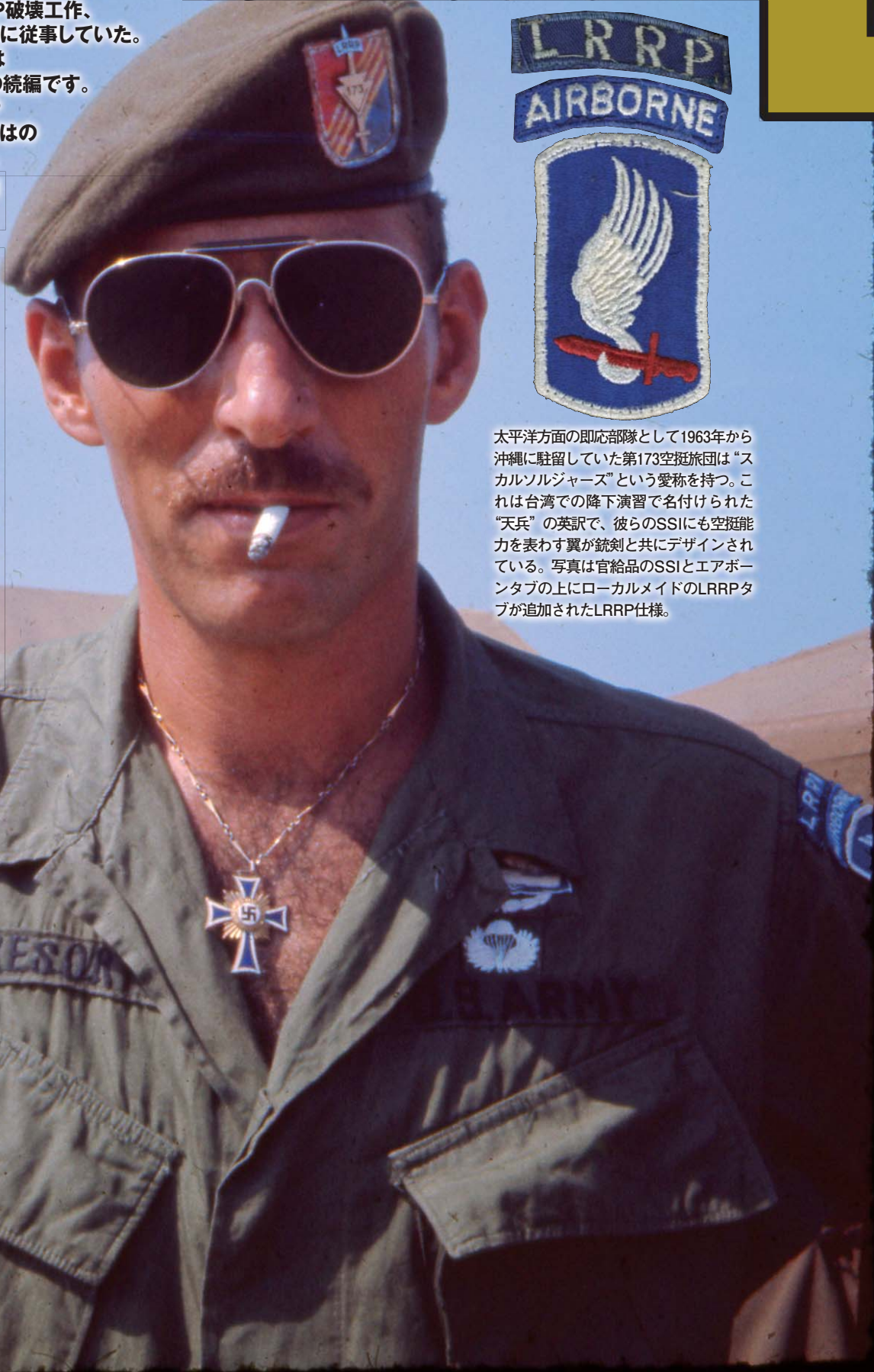
EYES OF SKY SOLDIERS

もう一つのグリーンベレー

ベトナムでLRRPと呼ばれた部隊はその名の由来である Long Range Reconnaissance Patrol= 長距離偵察任務の他にも敵の攪乱や破壊工作、ハンターキラー任務など幅広い任務に従事していた。彼らの活躍を伝えるシリーズ、今回は第1回で紹介した第173空挺旅団の続編です。前回伝え切れなかった貴重な写真や証言によりこの旅団のLRRPならではの個性がはっきりと浮かび上がります。

by Jay Borman 構成/鈴木健太郎
コーディネイト/河村喜代子

ベレー姿のラルフ リソー。部隊の名称が第74LRP分遣隊だった頃に撮られた写真で、オリブグリーンベレーにはLRPのフラッシュに古参を示すLRRP小隊のピンバッジが追加されている。ファティーグジャケットは第173空挺旅団のSSIが両肩に付けられていて彼が2度目のツアーである事が推察でき、左肩にはLRRPタブも見える。さらに空挺章、歩兵戦闘章、MACVリーコンド一章の姿も見え技量の高さは十分過ぎるほど伝わってくるがこの写真で注目すべきは首から下げられたナチスドイツの勳章 Ehrenkreuz der Deutschen Mutterで、これはヒトラー政権下で子宝に恵まれた母親に与えられた勳章なので彼がかつてドイツ軍兵士として武功を挙げた訳ではなく、単なるおしゃれとして取り入れたものである。この種のドイツ軍アイテムを身に付けた姿は第2次大戦のヨーロッパ戦線で戦ったアメリカ兵の間では良く見られ、ベトナムでも少数ながら着用例がある。



太平洋方面の即応部隊として1963年から沖縄に駐留していた第173空挺旅団は“スカイソルジャーズ”という愛称を持つ。これは台湾での降下演習で名付けられた“天兵”の英訳で、彼らのSSIにも空挺能力を表わす翼が銃剣と共にデザインされている。写真は官給品のSSIとエアポータブの上にローカルメイドのLRRPタブが追加されたLRRP仕様。

LRRP

鋭い視線で交信中も注意を怠らないクライド ブラウンJr軍曹。人種差別が激しかった60年代において黒人初のチームリーダーとなった彼は優秀な黒人兵士の象徴として雑誌「TIME」1967年5月26日号の表紙を飾った。軍曹のチームに同行したTIME誌のリポーターは「夜中に汗が流れる音が聞こえるほどの静けさと恐怖に包まれても、軍曹の勇気とプロ意識のおかげで私は正気を保つことができ、隊員たちと帰りのヘリに乗ると気がないうちにヘリのエンジン音よりもずっと大きな声でアニマルズの「We Gotta Get Out Of This Place」の様な歌声をあげていた」という記述を残している。

第173空挺旅団がベトナムに派遣された最初のアメリカ陸軍戦闘部隊として活動を始めた当初、旅団の偵察任務は機械化された第17騎兵連隊E中隊が行っていたのだが、この部隊がベトナムでの偵察活動に不向きなことが判明すると新たに志願者を募る形でE中隊内にLRRP小隊が編成された。LRRP小隊のメンバーはその多くがアメリカ本土の第101空挺師団リーコンドースクールやニャチャンのスクールで訓練を受けただけでなく、マラヤ動乱でジャングル戦を経験したオーストラリア軍からバトロールのノウハウを学んでおり、彼らの任務は主力部隊の前方15~20キロでの偵察活動の他、待ち伏せに対するカウンター攻撃、さらにはスナッチミッション（敵の誘拐）など広範囲に及んだ。1967年2月に第173空挺旅団の一個大隊がパラシュート降下したオペレーションジャンクションシティーはアメリカ軍によるベトナム戦争唯一の空挺降下作戦として有名だが、この作戦では旅団のLRRP小隊が降下地点の確保を行ない、11月のダクトーの戦いでは大統領感状を贈られる程の活躍をする中で68年2月には中隊規模の第74歩兵分遣隊（LRP）に改編された。翌69年2月1日に編成された第75歩兵連隊（レンジャー）への編入により旅団のLRP分遣隊が第75歩兵連隊N中隊（レンジャー）と改称した後はより危険な任務に投入される機会が増え、71年8月25日に中隊が活動を停止するまで偵察部隊という本来のコンセプトはしばしば無視された。第173空挺旅団のLRRPは軍装面で興味深いエピソードがあり、彼らは他のLRRPと同様に非公式のベレーを被っていたのだが、色は一般的な黒ではなくオリブグリーンで、後にレンジャー部隊のシンボルとして黒いベレーが各中隊に普及した際もN中隊では旅団の空挺隊員と区別が付かないという高級将校の反発を受けて着用を禁止され、旅団長による許可が下りたのは71年4月とベトナムに最も早く着きながら最も遅く黒のベレーを被った中隊となった。



Clide Brown Jr.



出撃前の第74LRP分遣隊偵察チーム。隊員たちが着ているタイガーストライプはコレクターにシルバーやゴールドと呼ばれるパターンが混在し左にはERDL迷彩服の姿もある。右の隊員が背負っているリュックサックにくくりつけられたクレイモア地雷やバラックの看板など見所の多い写真。



サイゴン物語 Saigon Memories

—ハノイ駅ガード下の軍服屋—

Military Uniform Stalls in Hanoi

かねがねモノを並べさせたら、ベトナムの人たちは、独特の几帳面さを発揮すると感心していた。ハノイでは、ホーチミン市にくらべて、そこんところがちょっと甘い印象があった。ところがどうして、人民軍正門前の制服屋で世にもびっくりな在庫の持ち方を発見セリ！街も通りも入りくみ、路上食堂の道路占有率が半端ないベトナム首都ハノイ！やはり奥は深かった。

文/コンバットマガジン編集部 Text/CM Editorial Staff
写真/今井今朝春、WPPコレクション Photo/Kesaharu Imai, WPP Collection

軍モノはコピーはもちろん販売も不可。それがベトナムの建前だ。事実、キオットに並ぶのはサープラス品でもない。これらはミリタリー色をしているファッションアイテムなのだった。

ハノイ駅はベトナム戦争中に米軍の空爆を受けて駅舎中央部分が大きく破壊された。そこをロシアテイストの陸軍根拠スタイルで修復した。イエローの両翼はフレンチコロニアル趣味が残っている。駅前の大通りがレスアン通り。旧市街に入ると道幅は一気に狭くなる。



ハノイ駅周辺に、ミリタリーサープラス屋が並んでいると教えられた。駅を背にして、レスアン通りを右方向に進む。通り沿いに、小さなブースに区切られた店があった形跡があるが、すべてシャッターが下りている。しかも鎖に大きな錠前をかけてあり、毎日、商売している様子はない。行くあてもなく歩きつづけていると、前方にカーキ色の塊が現われた。そこに10数軒のキオットと呼ばれる店が、道路に向かって口を開いていた。どこも間口は一間足らず。大きなところでもせいぜいが、一間半あるかないかの規模だ。並んでいるのは、ミリタリーブーツに帽子、上着、シャツ、ジャケットなどウエア類が中心だ。それにプラスして、道路工事人がよく身に付けている蛍光色の作業服が積み重なり、天井からぶら下がっている。客を待つというよりも、店の前でまったり時間を過ごしている女性に、話を聞いた。この場所に移ってきたのは20年ほど前。以前は、今、シャッターが閉まっている駅ガード下に店を持っていたという。だが、ハノイ駅の改修工事が始まるため立ち退き命令が出た。もともと、国有地だったので、拒否権はなし。50軒ほどあった店は、退去して皆、散り散りになった。現在は、不動産業者からリースで店を借りている。ここはもともと、靴専門の店が集まっている場所だった。そこにガード下から移ってきた5軒の店とともに、国防色ウエアが増えて、外見的にサープラス街っぽくなったのだという。ホーチミン市のヤンシン市場同様に、ベトナムでは政令で、人民軍の制服、バッジ、パッチ、モールや肩章などは許可を得た業者以外が、製造したり複製することは禁じられている。人民軍以外の、外国の軍モノも含めて、販売できない。建前はそうになっている。それらがファッションアイテムなら、問題ナシ！というワケでこのようなキオットが並んでいる。

東京マルイ 静岡ホビーショー・ニュープロダクツ

Photo&Text by Taku
 @東京マルイ 03-3605-3312
<http://www.tokyo-marui.co.jp/>

5月に行なわれた、模型最大の見本市、静岡ホビーショー。当然ながら、東京マルイも出展し、注目の最新モデルが発表された。注目の最新モデル2挺をピックアップし紹介しよう。



89式折曲銃床型
 ●全長:670/916mm(ストック伸長時)
 ●重量:約4,000g
 ●装弾数:20発
 ●価格:69,984円

基本的なシルエットは固定ストック・モデルと大きな変化はない。コンパクトさを重視したモデルのため、マガジンは20連ショートマガジンが標準装備される。



フラッシュハイダーには6つのスリットが設けられており、発射の際のガスを左右に排出して射撃の安定性を図る。

フォールディングストックを折り畳めばかなりコンパクトになる。閉所ではストックを折り畳み取り回しやすくし、精度が必要な時はワンタッチでストックを伸ばす事ができる。

ガスブローバック TYPE 89 Folding Stock Model

大人気の89式小銃にファン待望のフォールディングストックモデルが登場!!

ホビー関連最大のイベントである「静岡ホビーショー」が今年も開催された。国内の名立たるメーカーが一堂に会して開催されるこのイベントでは、既存の製品はもちろん、これ

から発売を予定しているニューモデルなどの発表や自衛隊の車両の展示、一般参加者によるプラモコンテストなどが行なわれる事で知られている。

東京マルイでも、夏から秋にかけて発売されるニューモデルの発表が行なわれるとあり、多くのトイガンファンの注目を集めている。今回も

数機種のニューモデルが発表されたが、その中でもっとも注目度の高かった機種がガスブローバック・アサルトライフルの最新作『89式折曲銃床型』だろう。言わずと知れた日本の自衛隊が制式採用している純国産のアサルトライフルだ。

前作の『89式5.56mm小銃』に折り

畳み式のフォールディングストックを装備したバリエーションだが、固定ストックモデルとは要所要所に変更が加えられているという。まず大きな違いは折りたたみ式となったストック基部だろう。可動部分が追加された事による強度不足を考慮し、ロアレシーバーおよびヒン

ジ部分などを新規設計する事で細部に渡るまでこだわった作りとなっている。また左側にセレクターを装備したアンビタイプのため、チークピース部分に逃げのための窪みが設けられている。

新規モデルではあるが、89式5.56mm小銃をベースとしている事もあり、開発スピードは早く、今回のホビーショーではほぼ量産モデルに近い状態での発表となった。とはいえ、細かな部分はまだ試作モデルという事なので、発売の際には改良される部分もあるという。

数少ない純国産のアサルトライフルの発売とあって、会場では多くの来場者の注目を集めていた。東京マルイのガスブローバックメカニズム

「Z-SYSTEM」は、気温の低い状況下でも快調かつ迫力のリコイルを楽しめるので、リアル派からライトユーザーまで人気のメカニズム。ガスガンと聞くと、どうしても暖かい季節限定と考えるしまうが「Z-SYSTEM」を搭載したガスブローバックシリーズならば、季節を問わず屋内外で活躍が可能だ。

詳細や実射に関しては製品版にアップデートされたあたりで改めてレポートする事になると思うので、そちらをご覧ください。自衛隊マニアに限らず、幅広いユーザー層に注目の1挺である。

静岡ホビーショーでお披露目された89式折曲銃床型のPV撮影風景。PVは東京マルイ・ホームページ、YouTube東京マルイ公式ch (https://www.youtube.com/channel/UC_hIMdokLU_n0_pxkWaVKg) で公開中だ。

フォールディングストック・モデルの心臓部ともいえるストック取り付け基部は剛性も高く少々ラフに扱ってもガタつくような事はない。

折曲銃床式のために新規設計された20連ショートマガジン。89式の特徴である側面に開けられた残弾確認用の窓はモールドで再現されている。

